

次号予告

特集	脳性麻痺（とくに成人を中心に）	
	脳性麻痺と老化……………	神奈川リハセンター 安藤 徳彦
	脳性麻痺者の作業能力開発の試み……………	兵庫リハセンター 大喜多 潤
	〃……………	神奈川リハセンター 佐藤 馨
	〃……………	大阪府立身体障害センター 坂本 憲一
	成人片麻痺に対する理学療法……………	都心障センター 工藤 俊輔
	脳性麻痺におけるリハビリテーション機器の有効性と限界……………	都補装具研 加倉井 周一
講座	理学療法概論 5. 理学療法における研究領域……………	都老人研 伊東 元
	中枢性運動制御の生理学 3. 脳幹の運動中枢……………	東京医科歯科大顎研 中村 嘉男
プロGRESS	身体障害者のリハビリテーション(5)……………	国立大阪南病院 博田 節夫
	看護教育のめざすもの(5)患者と学生とスタッフと……………	千葉大学 薄井 坦子
	リハビリテーション・インフォメーション<山形県>……………	鶴岡市立荘内病院 浅見 敏克・他
	<熊本県>……………	菊南病院 高柳 朔司・他
養成校紹介	徳島県盲学校……………	繁本 芳江・他
	行岡医学技術専門学校……………	佐藤 和敏

編集後記

新卒の方々にとって国家試験の発表、就職と悲喜こもごものシーズンである。今回の特集“教育”は素質、臨床教育、生涯教育の重要性を柱に組まれているが現場の方にも耳の痛い内容のことが多い。竹内氏による“人間生活の確立をはかるリハビリテーション医学”についての“とびら”は障害学、全包括的医療の発展にもたっている我が国の現状への提言としてとらえられる。砂原氏の“人間学”はPT・OTは専門の技術を持っているので幸せである事を強調すると同時にPT・OTが陥りやすい危険についても指摘しておられる。確かにナースは自主性をうち出そうとすれば何が仕事かわからなくなる要素が大きい。しかし逆にナースが全包括的医療のリハビリテーション医療に啓蒙されその気になれば医学的知識はPT・OTより平均して上であるからPT・OTの分野に侵入して来る可能性も持っている。そのような中で相変らずベルトコンベア方式でセラピストのレベルに患者を強制的に押さえつけている現場にお目にかかる事が多いのは残念である。

そのような事が続けば増々自主性のないナースはPT・OTのあげ足をとるだろうし、ワーカーも力がつけばPT・OTの能力の個人差を見抜くのは簡単である。

新しく発足した文部省令の短大は立野氏の御努力に負うところ多大であるが、文部省の素人役人向けの聞きなれない学科が並んでいるのが興味深い。是非臨床、研究、教育の3本柱を備えた人材を送り出して大学の必要性を説得する生きたサンプルにして頂きたいと願っている。養成校における教育に関する要望の中には教師と生徒に対するかなり強烈な批判がこめられているようであるがまさにその通りと納得出来るものが多い。講座は2本とも大変参考になり勉強になる力作である。卒後教育を怠る事なく是非この特集により今後はPT・OTも量より質が問われる時代が確実に来る事を覚悟して頂くよう心から願っている次第である。

(荻島秀男)

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院長五味 重 春
埼玉県生活福祉部砂 原 茂 一
国立療養所東京病院名誉院長津 山 直 一
東京大学教授・整形外科水 野 祥太郎
川崎リハビリ学院長
(五十音順、以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部荻 島 秀 男
リハビリテーションペ
イン(痛み)クリニッ
クわらび診療所大 喜 多 潤
兵庫県リハビリセンター鈴 木 明 子
北海道庁寺 山 久美子
都心身障害者センター奈 良 勲
金沢大学医療技術短大福 屋 靖 子
筑波大学松 村 秩
都養育院リハビリ部

<編集同人>

大 橋 博

大 丸 幸

金 子 翼

鎌 倉 矩 子

紀 伊 克 昌

駒 沢 治 夫

佐 藤 章

佐 藤 馨

嶋 田 智 明

高 橋 正 明

武 富 由 雄

谷 岡 淳

富 岡 詔 子

中 屋 久 長

藤 沢 しげ子

松 本 妙 子

丸 谷 隆 明

矢 谷 令 子

山 下 隆 昭

和 才 嘉 昭

(担当 細田・西塚)